



MONGOLIA

学校名：群馬県立あさひ養護学校

氏名：小山 貴裕

[担当教科：現代社会]

- 実践教科等：現代社会
- 時間数：7時間
- 対象生徒：高等部1、2、3年生
- 対象人数：7人

1 単元名

日本とモンゴルの関係から、援助について考えよう ～遊牧民に援助は必要？不必要？～

2 単元の目標（ESDの能力・態度）

- ・モンゴルの文化や人々の生活を知ることを通して、異文化や異文化に住む人々への興味・関心・理解を高める。
(つながりを尊重する態度)
- ・自分たちの生活とモンゴル人の生活を比較し、分析することで自分たちの生き方を振り返る。
(批判的に考える力)
- ・援助について、援助する側される側の立場に立って多面的に考え、両者にとってよりよい援助とは何かを考える。
(多面的・総合的に考える力)
- ・JICAの活動内容を知り、日本が行う国際貢献の実態と課題を理解する。(つながりを尊重する態度)
- ・発展途上国の課題だけでなく、自分自身の課題にも向き合い解決しようとする態度を養う。
(すすんで参加する態度)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- ・日本とモンゴルの生活や文化の違いを理解して、それらを尊重する。【多様性】
- ・日本とモンゴル、先進国と開発途上国の相互依存関係について理解する。【相互性】
- ・日本が行う国際協力の内容を知り、必要な援助について考える。【連携性】
- ・遊牧民の生活や考え方をすることで、自分の未来、幸せについて主体的に考える。【責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

今日の国際情勢において、「異文化理解」は重要なキーワードになっている。2020年には、東京オリンピックが行われる予定であり、日本政府はそれまでに外国人観光客を2000万人にする目標を立てている。また介護職にも東南アジアの人材を雇用する政策が行われている。つまり、日本国内でも異文化に触れる機会が増えているのが実情である。それは、本校の肢体不自由児も例外ではなく、「異文化理解」が必要となっている。また、グローバル化が進んだ日本では、外国の文化を知る機会が増え、生活様式も日本古来のものでなく、欧米式のライフスタイルに変わりつつあり、その中で、日本の良さや逆に日本に足りないことが見えにくくなっている。それは、日本という大きな視点だけでなく、個人の視点であっても同じであると考えられる。そこで、外国の文化を知ることで、自分の生活と他国の生活を比較し、自分の生き方を振り返るきっかけとし、よりよい生き方を模索できるのではないかと考える。

しかし、肢体不自由児の特別支援教育で国際理解教育の実践例は決して多くない。そこで、本研修の経験を生かして、特別支援教育だからこそできる国際理解教育の実践のために本単元を設定した。

本単元では、高等学校指導要領の第3節公民、第2款第1現代社会の内容にある「自ら人間としての在り方生き方について考察する力」や「国際社会における日本の果たすべき役割及び日本人の生き方について考察させる」ことを踏まえて目標を設定した。また、本校の学校教育目標である「個々の実態を踏まえ、主体的に自己の力を発揮して、よりよく生きる力を培う」ために自分の障がいと向き合いながら「よりよく生きる」、つまり幸せになるためにどうしたらよいのかを考えさせたい。

具体的には「援助のあり方」について焦点を当てて単元構成を考えた。日本がモンゴル(開発途上

国)に対して行う政府開発援助(ODA)について知り、その中で援助をするときに大切にすべきことを考えさせたい。また、日本は世界でも最も援助額が多い国の一つであるが、東日本大震災があった2011年には、世界で最大の被援助国となった経験から、援助する側とされる側がいつ変化するかわからない現状がある。これは生徒が障がいのため移動や排泄などの援助を必要としているが、一方で日本国民として直接的、間接的に開発途上国に対して援助を行う立場でもあることと似ている。そのため、本校生徒は日本の援助のあり方を援助する側とされる側の両面からとらえることができるのではないかと考えた。そして、その両面から援助のあり方を考え、援助の改善点を見つけることで、生徒たちが身近の支援を受けるときに本当に自分に必要な援助を受けるためにはどうしたらよいかが見えてくるのではないかと考えた。また、モンゴルの遊牧民と自分達の生活や幸せに関する考え方を比較することで、本当の幸せとは何なのか、どうしたら幸せになれるのかを話し合いをしながら追求していきたい。

(2) 児童生徒観

対象生徒は高等部の1～3年で、1年男子3名、2年男子1名、2年女子2名、3年男子1名の計7名である。いずれも障がいによって下肢や上肢に麻痺があったり、進行性筋疾患のため全身の筋力が低下したりしている。そのため、移動では7人とも日常的に車イスや歩行補助具を使用している。また、教科書やノートの準備や排泄や更衣の一部に介助を必要としている生徒もいる。また、ワークシートへの記入や吃音のため発表にも時間がかかったりする。7人とも知的障害のない高等学校に準ずる課程の生徒であるが、知識や理解力、表現力は大きく個人差が見られる。

本生徒達は、海外の生活や文化に興味をもっている。テレビ番組で旅番組をよく視聴していたり、担任の海外旅行の話をよく聞き、質問をしたりしている。しかし、本単元に関わるモンゴルのことや日本が行う国際援助の実態をよく知っている生徒はいなかった。また、卒業を控えた3年の生徒を筆頭に卒業後の生活に不安を抱く生徒も少なくない。

(3) 指導観

上記に記述したように対象生徒は障がいをもっているために、普段の生活で担任を含め多くの人から援助を受けて生活している。そこで、本単元では援助をする側される側の両面から考察していきたい。そうすることで国際援助というマクロな視点だけでなく、生徒自身の実体験から援助について考えることができ、それが援助を受ける生徒自身の生活も見直すきっかけになるのではないかと考えた。また、興味・関心をもちやすい遊牧民の生活から援助がもたらす生活の変化などを学び、援助と幸せの関係性や自分の未来について考察させたい。本単元では、自身の障がいと向き合い、将来について考える機会をもつため、個々の自体に応じた精神面の配慮が必要である。そのため、授業中に投げかける言葉を精選し、T2と協力して生徒の精神的な負担を軽減するような働きかけを行っていきたい。

5 評価規準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	モンゴルの文化や国際援助に対する関心を高め、そこからよりよく生きるために、自分の生き方や幸せについて考察を深めようとしている。	モンゴルへの援助を援助側、被援助側の両面から考察し、よりよい援助のあり方を判断して、その過程や結果を様々な方法で表現している。	援助に関する諸問題について考察し、自分の言葉でまとめて記述し、他者に伝わるように発表しようとしている。	JICAの活動内容を知り、日本が行う国際貢献の実態や課題を解決する方法について理解し、その知識を身につけている。
評価方法	学習の様子 ワークシート 授業中の発言	ワークシート 授業中の発言	授業中の発表 ワークシート 学習の様子	テスト ワークシート

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	○モンゴルについて知る	モンゴルの文化、風俗、生活様式などに対して興味関	・モンゴルについて知っていることを挙げる。 ・モンゴルクイズ(国旗、言語、食べ物、服な

		心をもつことができる	どを紹介) ・モンゴルの様子を知るために、ウランバートル(都市部)や遊牧民の生活風景(地方部)の写真や動画を見せる。
2,3	○援助について考える	援助に対する自分の考えをまとめて、発表できる。	・ワークショップ『「援助」する前に考えようー参加型開発とPLAがわかる本』(原作:田中治彦、発行:開発教育協会)の「アイコさんのバーン村への支援から考える」を行う。 ・「必要な援助とは？」を考える。
4	○日本の援助って何してるの？	ODAの内容やJICAの活動を理解できる。 援助をする側される側の両面から“必要な援助”について考えることができる。	・ODAの内容やJICAの活動を知る。 ・青年海外協力隊(池田隊員:バスケットボール指導)の活動を知るために映像資料を観る。 ・青年海外協力隊(池田隊員)の指導を受けた現地の人達の想いを知る。 ・援助を受ける側の立場になって、必要な援助を受けるためにはどうしたらよいかを考える。
5	○援助ってなぜするの？	「なぜ援助をするのか」という問いに対して自分の考えをまとめて、発表できる。	・現在、日本は多額の借金を抱えているのにも関わらず「なぜ援助をするのか？」を教師が提示した資料をもとに考え、発表する。 ・日本から開発途上国への援助で、日本が受ける恩恵について考える。 ・先進国と発展途上国の相互依存関係について知る。
6	○遊牧民の生活と自分の生活を比較しよう！	遊牧民の生活と自分の生活を比較し、類似点や相違点を見つけることができる。	・遊牧民の生活を撮った写真を用いて、フォトランゲージを行う。 ・遊牧民の生活様式や1日の生活の様子を知る。 ・遊牧民の生活と自分たちの生活を比較して、類似点や相違点をまとめる。
7	○遊牧民の生活に援助は必要？	遊牧民の生活から、援助と幸せの関係性について考えることができる。	・遊牧民に対して援助は必要か、不必要かを考える。 ・必要であればどんな援助が必要か考える。不必要であればなぜ不必要なのか考える。 ・遊牧民へのインタビューを観る。 ・「援助は人を幸せにするのか？」という問いに対して自分の考えをまとめる。 ・援助と幸せの関係性について考える。

7 授業事例の紹介

小単元名【遊牧民の生活に援助は必要？】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10月21日(火)第2限

(イ)実施会場 高等部1組教室

(ウ)本時の目標

○遊牧民に対して援助の必要性について自分の考えをもち、発表できる。

○既習の学習から、援助と幸せの関係性について自分の考えをまとめることができる。

(エ)指導のポイント

遊牧民への援助の必要性から、援助が人を幸せにするのかを考えさせるところ。そこから日常生活の中で援助を受けることがある生徒たちが、どのような援助を受けることで自分自身が幸せになるかについて考えるきっかけにしたい。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	○援助に関する既習のキーワードを白板に貼り、前時までの学習内容を振り返る。	○前時までの学習内容を復習する。	一斉	・T2と協力して、支援が必要な生徒を介助したり、姿勢を保持できるようにしたりする。	
展開 17分	○右記の発問をする。T2とともに机間指導を行い、書き進められない生徒に対して前時の学習内容を思い出させる働きかけをする。	○「遊牧民に対して援助が必要か不必要か」を考える。必要であればどんな援助が必要か考え、不必要であればその理由を考えて、ワークシートに記述する。そして、自分の考えを発表する。		・生徒の考える時間やワークシートに記入する時間、発表の時間を十分にとる。 ・発表のファシリテーターをT1が行い、T2は発表内容を板書していく。 ・吃音がある生徒の発表では、本人の考えに沿って補足説明する。	○遊牧民に対する援助の必要性について考え、自分の意見を発表する。 (ワークシート・発表)
3分	○右記の発問をすることで援助と幸せの関係性について想起させる。	○「遊牧民の生活は幸せであるか」を考え、幸せか幸せでないかを判断する。		・この発問に対しては時間をかけずに直感的に判断させる。	
3分	○遊牧民へのインタビュー内容をPowerPointで提示する。	○遊牧民の幸せについての考え方を知る。		 ↑ 遊牧民へのインタビュー内容の紹介	
17分	○右記の発問をする。T2とともに机間指導を行い、書き進められない生徒に対して本時や前時までの学習内容を思い出させる働きかけをする。	○「援助は、人を幸せにするのか」を考える。幸せにする、やや幸せにする、どっちとも言えない、やや不幸せにする、不幸せにする、から選択し、理由をワークシートに記述する。そして、自分の考え方を発表する。			○援助と幸せの関係性について自分の考えをもつことができる。 (ワークシート)
まとめ 5分	○板書してある生徒の意見を中心に本時のまとめを行う	○板書してある他の生徒の考え方と自分の考え方を比較しながら、本時のまとめを行う。		・担任の押しつけにならないように注意しながらホセ・ムヒカ大統領の言葉を紹介する。	



←援助と幸せの関係について真剣に考える本生徒。

遊牧民の生活が幸せかどうかを判断させて



本時では、既習の学習内容をもとに、「遊牧民に対して援助が必要か、不必要か。」「援助は、人を幸せにするのか。」の発問を中心に援助の必要性や援助と幸せとの関係性を考察させた。担任の説明を極力減らし、考察し、発表する時間を十分にとった。本時の終盤、「援助は、人を幸せにするのか。」を考え、ワークシートにまとめている途中で一人の女子生徒が泣き出すことがあった。後から女子生徒に理由を聞くと、「自分が受けてきた支援で嫌なことがあった。」「フィリピン(女子生徒は日本とフィリピンのハーフ)に戻ったとき、日本の援助のことで責められた経験がある」などを語ってくれた。自分の経験と本時または既習内容を結びつけて「援助のあり方」について深く考えることができていた。この女子生徒以外にも、自分の生活を振り返って援助について考え生徒がいた。

・援助する側される側双方の顔が見えても、進んで援助を行っても必要とされる援助を行わなければ幸せにはならない。現地の方が慣れた生活を援助によって崩してしまった場合、それは不必要な援助になる。

＜良かった点＞

これまでの学習が生かせる学習内容であった。援助の本質について話し合いを重ねてきたため、どの生徒も担任の発問に対して、しっかり考え、自分の意見をまとめることができていた。遊牧民の生の声を提示できたため、援助をする側される側の両面の想いを共有できた。また、遊牧民への援助からスムーズに援助と幸せの関係性、つまり現在の自分を取り巻く支援環境を考えるきっかけになったのではないかと思う。

遊牧民のインタビュー内容を生徒に提示するとき、インタビュー風景を撮影した動画を使用した方がより真実味があり、より生徒の心に響いたのではないと思う。動画に雑音が入り音声小さかったため、そのまま生徒に提示できなかった。インタビューなどの映像資料を集める段階から生徒に見せることを意識するべきであった。また、画像の編集を丁寧に行うことで、生徒に提示できる資料になったのではないと思う。

○遊牧民へのインタビューをまとめたPowerPoint、ワークシート

国際理解ワークシート3

高等部 名前

<遊牧民の生活に援助って必要?>

Q 1. 遊牧民に対して、援助は必要?それとも不必要?

(必要 やや必要 やや不必要 不必要)

<理由>

Q 2. 援助は、人を幸せにするのか?

(幸せにする やや幸せにする どちらとも言えない やや不幸にする 不幸にする)

<理由>

(4) 参考資料等

- ・Hana.bi サイト「リオ会議で最も衝撃的なスピーチ：ホセ・ムヒカ大統領のスピーチ（打村明日本語訳）」
＜<http://hana.bi/2012/07/mujica-speech-nihongo/>>（2014 年10月10日アクセス）

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

本単元の学習を始める前は、生徒達はモンゴルについて曖昧な知識しかなく、日本が行う国際援助についてはほとんど知らなかった。しかし、本単元の終盤になると、モンゴルの実態を踏まえて、援助について深く考えることができていた。以下は、本単元の最後に生徒が書いた「この学習を通して学んだこと、考えたこと、感じたこととは？」の回答である。（一部抜粋）

- ・僕たち先進国の生活が基準ではなく、その地に住む人々によって感じ方が異なるので、一人一人の意見を尊重していきたい。
- ・援助は必要以上に行くと、援助される人たちが欲深き人間になってしまうと感じた。
- ・今回の学習はモンゴルの援助が中心であったが、それ以外の国に対する援助はどうしていくべきか議論したい。
- ・必要とされる援助をしなければ人は幸せになれない。援助を受ける現地で、現地の人々が慣れた生活を援助によって崩してしまった場合、それは不必要な援助になることがわかった。

生徒達の中で「援助が必要（と思われる）＝不幸せ」ではなく、援助が押しつけにならず、現地のニーズに合った援助が必要だという意見が多く出てきた。これは、途上国に対するものだけでなく自分自身の現状にも投影しているのではないかと感じた。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

生徒達は、援助について多面的に捉えて、「必要な援助」について深く考えてきた。そして、生徒自身の「必要な援助」はどうあるべきかを考え、どのような援助が自分の幸せにつながるのかを考えるきっかけになったと思う。今後、生徒達が進路選択や生き方について迷ったときに本授業実践が少しでも役に立てば、それが成果なのではないかと考える。

○本単元における PDCA サイクル

段階	項目
P 計画	①学習指導計画を作成した。②実施クラスの学習状況や障がいの実態把握をした。 ③高等学校指導要領や学校教育目標、担任の思いをもとに授業のねらいを設定した。 ④学習指導案を作成した。
D 実施	①ねらいに基づいて、モンゴルで得た資料を教材にした。 ②生徒の状況に応じて、授業の時間配分を変えたり、追加の教材を提示した。 ③ワークシートに考えを記入させた。④授業を学校内外に公開した。
C 検証	①ワークシートや授業の発言、テストをもとに評価基準に照らし合わせて評価を行った。 ②管理職や T2、授業を参観した教師から助言を得た。③授業を振り返り自己評価を行った。
A 改善	①検証をもとに新たな教材を作成したり、映像資料の質を高めたりした。 ②生徒が学習状況を把握できるようにするため振り返りカードを新たに作成した。 ③生徒の生育環境、障がいの実態のより一層の把握に努めた。

10 教師海外研修に参加して

今回、本研修に参加した動機は、「肢体不自由がある生徒に世界を体感させたい」と「教員として自分の武器になるものがほしい」であった。前者は、モンゴルで得た様々な教材を提示し、私自身が行った体験談を話し、国際協力の現場で活動する人の様子を見る、そして自分の生き方を考えるなど、有意義な時間を生徒に与えることができたのではないと思う。後者は、今まで教員として自信をもって指導できることが少なかった私に、国際理解教育や ESD の視点での授業づくり等で少しの自信を与えてもらった。そして、本研修で私が獲得したものの中で最も貴重だったのが“人とのつながり”である。モンゴルで出会った人やモンゴルの人たちのために一生懸命働く青年海外協力隊の方々、情熱をもって開発援助を行う JICA 関係者、そして10日間の濃密な時間をともに過ごしたモンゴルチームの仲間達、本研修を通して出会ったすべての人から影響を受け、モチベーションをもらい、学ぶことができた心か

ら感じている。これからも、この教師海外研修でできたつながりを大切に子ども達への国際理解教育の普及を進め、自分自身も青年海外協力隊などの国際協力にも参加していきたい。